



1983・冬・第14号

Агора アゴラ

鶴見大学図書館報



目 次

吾唯知足	手崎 政男	1
上野の杜と図書館	細井 紀雄	2-3
書物雑誌いろいろ		4-9
新刊アラカルト		10-11
図書館だより		12

吾唯知足

図書館長 手崎 政 男

「情報」という語が今や図書館界を席卷しつつあるかのごとくだ。これは、全く思いがけぬ事情で図書館にかかわるようになり、各種の会合に出る機会を重ねる中で、しだいに私の気になりはじめていることのひとつだ。

図書館が「情報」を得る場であり、それを提供する機関でもあることを私は否定するつもりはない。また、とにかく速効を望んで、学問的成果をまでも「情報」の形で入手しようとする風潮も否定し得ない。それだけに、ある種の危惧の念を私は抑え得ないのだ。大学の演習などの場でも、それが誰の、どのような状況下のものかに全く無関心の報告をする学生に接することの多いこととあわせて、私

のこの危惧の念はさらに増幅される。

「情報」は、いわば、知識の体系の中から性急な必要に応じて切り取られる「断片」にすぎない。そこでは、長い試行錯誤をくり返しつつ真実の探求に献身した「人間」の要素が不在になる。その極、人がその端子をたたけばいつでも応答する情報提供機関——人間のそれに代わって24時間作動する巨大な機械の「頭脳」——が、未来の図書館の理想像であるかのごとき錯覚を生みかねないのだ。

しかし、図書館はあくまでも「人間」発見の場であるべきで、それが情報の変じた「もの」の収蔵庫であったり、ましてや単なる情報提供機関にとどまってはならないだろう。

上野の杜と図書館 文学に憧れた頃

歯学部教授 細井 紀雄

連想ゲーム風に言えば、図書館というと私は上野公園を連想する。それはかつて私が通学した高等学校の図書館と上野図書館がいずれも上野の山、東叡山の一角にあったからであり、最も印象深いからである。

図書館を訪れるのは、文献を探すためとか、レポート作製のためとか、参考書をひもとくためとかという速効性の必要に迫られた場合が多く、強制されず自分の意志で自由にゆっくりと利用したという経験は高校時代しかないのである。そして皮肉にも文学書を読み過ぎて(?)、大学に入るのに一浪^{ひとなみ}の苦勞をした時、受験勉強のためにもっぱら利用したのが上野図書館である。この極端な図書館の利用法のちがいがどちらも徹底していたため図書館というと上野と結びついてしまうのである。今から25年以上も前になるが、当時は戦後の混乱期がようやく終ろうとする頃であり、公園内には大きなテントがそこそこに散在し、戦災に遭って身寄りの無い人々が生活し、浮浪者も溢れていた時代である。

高校の図書館

なんの施設もなかった中学校に比べ、入学した高等学校は二階付きの講堂、体育館、プール、そして立派な図書館を備えており、いかにも歴史のある古い学校という印象であった。図書館の内部は書架も机も木製で重々しく、和洋の文学全集がずらりと並び古色蒼然として、図書館独得の何やらカビくさい臭いに包まれていた。少し薄暗い、荘重な雰囲気^{ふんいき}に圧倒されると同時に、その中に埋没して本が読めるんだという期待に胸を膨らませていたことを覚えている。そんなわけで私が図書館に抱くイメージは採光を十分にとった明るい建物ではなく、重厚な、どちらかというと

陰気くさい感じになってしまうのである。

さらに専属の司書の方が居たことも驚きであった。その頃、始めて司書という職業があることを知ったわけであるが、大変物静かな優しい方で圖書の相談や貸し出しにのってくれた。後年、私は本学図書館の司書の方々にも全く同じような印象を受けたので、図書館人^{としやうじん}というか職業人として共通の資質が備わってしまうのかと興味を持ったものである。

高校生というと、人生とか生と死、科学と宗教、友情などについて真剣に悩み考える年頃であるが、私もいっばしにその様なことを思い悩んだ。誰にも相談できず、独りで深刻ぶっている時、図書館に整然と並んだ本が解決の糸口を与えてくれそうな気がした。いわば文学に憧れた時期でもあったが、私は書架の中の近代文学全集、確か黄土色の表紙で製本された、二葉亭四迷とか紅葉、露伴に始まるあの全集を放課後、図書館で読みふけた。志賀直哉、有島武郎あたりまでの明治、大正期の作家を中心に読み進んだと思うが全集を年代に沿って読むような読書法が良いかどうかは別として、丸暗気によって作家と作品名を結びつけていただけの私にとっては始めて小説の内容に触れ、様々な生き方、考え方があることを知り、人の心の機微^{きび}というのが少しはわかったような気がしたものである。たとえば、花袋の『蒲団』に未知の大人の世界を垣間見、漱石の『三四郎』に青春を夢想し、『こゝろ』には自己主張の強さに驚かされ、実篤の『友情』には隣人愛に心を打たれるといった風に……。また、『或る阿呆の一生』など芥川龍之介の作品には暗い悲観的な人生を見るようで自分も青白い文学青年になったかのように錯覚した。何事にも感じやすく、

それだけに純粹であったその頃は、ある時は図書館の静寂の中で、ある時は電車の喧騒の中で、小説の世界に沈潜し、時が過ぎるのを忘れるほどであった。

眼を休めて図書館から外に出ると上野周辺はまた文学者や文学作品とも縁が深い。幸田露伴が書いた『五重塔』は題材とした五重塔が谷中の墓地内に当時未だ健在であり、毎日通学の道すがら、迎ぎ見てはのっそり十兵衛を思い、職人の技術と人情の世界を想像し、楽しんだが、その後焼失してしまい誠に残念な事である。樋口一葉が一時住んでいた龍泉寺界隈も谷中からほど近く、長屋風に連らなっていたいかにも下町らしい街並を歩くと、物悲しい少女の運命を描いた『たけくらべ』の明治の昔を彷彿させるに十分であった。鷗外の『雁』には上野不忍池附近を散歩する情景が描かれているが、こちらは夕方ともなるとアベックが多く、放課後散策することなどとてもできなかった。

このように若い頃親しんだ本と図書館が特に懐しく想い出されるわけであるが、ひるがえって現在をみると今は昔、あれほど熱中して読んだ文学書にも若い時ほど欲求は湧いて来ず、感激も薄らいでしまった。よく、同じ作品を20代、30代……60代と読み返すと、味わいも一段と深まり、読後感も変るといわれるが、海綿のようになんでも吸収できたあの頃に比べると集中力がなく、なかなか最後まで読み終えないうちに本を閉じてしまう。忙しいせいもあり、図書館へ行く時は専門の本や文献を探す時というのが昨今である。

上野図書館

もう一つの想い出は上野図書館である。現在はその機能の大部分は国立国会図書館に移ってしまったが建物は残っていると思う。高校を卒業して浪人生活を送ることになった時、高校とは至近距離にあった上野図書館で今度は読書ならぬ受験勉強をした。古い建物で天井が高く、夏は暑く冬は寒いところで、

夏休みなぞ終日図書館にいと、変な話だがお尻に汗もがけるほどであったが、落ち着いた雰囲気妙に心を和ませるのであった。記憶ちがいでなければ夜8時か9時頃まで開館していたし、入館証に記入すれば、閲覧室の席を確保することができた。そこで同じ境遇の友人と持参の問題集なぞを拡げ、自分の



勉強機の代りに利用していたのだから蔵書数を誇る有数の図書館も我々を哀れんでいたかもしれない。もつとも他にも受験生は沢山いたし、少し馴れてみると司法試験を受けるために六法全書に一生懸命朱線を入れている年配の人達の姿をよく見かけた。公共の図書館が図書を利用するのではなく、勉強の場所としてこのような人達(?)に机を占領されてしまうのは決して良いとはいえないのだろうが、当時は住宅事情が悪かったせいか、或いは図書館の持つ静かな、いかにも勉強の能率が上りそうな雰囲気がそうさせるのか、よく利用されていたようである。今でも受験シーズンになると日比谷図書館に学生が行列して席取りをするというニュースを聞くと苦笑を禁じ得ないのである。

現代はオーディオと映像全盛の時代であり本をいちいちひもとかなくとも眼から耳から沢山の情報が入ってくる。一方では新刊書も洪水のように溢れているようである。図書館の使命や機能も多様化し、私の想い出の図書館とは大部変わってしまうのであろうか。

書物雑誌いろいろ

俗に書物雑誌もしくは書物誌という言葉がある。その内容を知るものからみれば、言い得て妙である。しかしこの言葉は謎に満ちている。専門の事典や用語集の類をひもといてみても見当らないからである。外国ではどうかとみれば、やはり駄目である。Magazine for book lovers とか Bookman's Journal とかいった具合で、ピンとこない。要するに市民権を得てないということである。それでは、いったい誰がいつから使い始めた言葉なのだろうか。大凡の見当はつく。たぶん内田魯庵か斎藤昌三あたり。斎藤の場合、昭和6年創刊の『書物展望』に、「図書関係雑誌解題」を連載している。その時点ではまだ図書関係雑誌である。戦後に至って、『書物誌展望』（八木書店 昭30）を刊行するに及んで、ようやく使っている。

ところで問題はまだある。書物雑誌の定義が不明確なことである。書物雑誌とは何か。斎藤は『書物誌展望』のはしがきで、書物雑誌に対して図書研究誌という言葉を使ってその概念を説明し、130点の書物雑誌を収録している。その内訳には、出版書目、図書館関係雑誌、出版社のPR誌、古書肆の販売目録兼用の研究誌、書評・読書雑誌、書誌学研究誌などが含まれ多彩である。因に日本近代文学館編『日本近代文学大事典』（講談社 昭52）の第5巻「新聞・雑誌」篇を繰ると、『出版月評』『書物往来』など9点が取り上げられており、種類を示す言葉として、書評・評論雑誌、書物雑誌、書物研究雑誌、出版文化雑誌、読書雑誌などが記載されている。このことから判断すると、書物雑誌という言葉は、広義に使われる場合と、書物研究に限定された狭義に使われる場合とがある。書誌研究懇話会編

『書物関係雑誌細目集覧』（日本古書通信社 昭和49—51）では、いわゆる狭い意味の書物雑誌56点を収録している。

大体日本の書物雑誌は明治以来のもので、それ以前の書物史には皆無であり、『出版書目』が明治11年に内務省から刊行されたが、以後書物の内容や批評を載せた書誌的なものが現われるのは、明治20年頃からである。書物雑誌がもっとも盛観を見たのは、震災後の大正末期から昭和初期にかけてである。

調査を進めていく内に判明したことは、書物雑誌には二つの特徴があって、一方は短命なことであり、もう一方は編輯人あるいは発行人の恣意が如実に反映されていることである。取分け編輯人と発行人が別な場合、発行人の道楽半分と言おうか、道楽そのものの出版が少なくない。概ね短命の原因はその辺にあるのだろう。以下、所蔵分より若干を拾い出し解題を加える。

典籍 大正4・5—4・11。隔月刊。4冊。菊判。編輯兼発行人、木沢孚。実際の編輯人は後藤肅堂。発行所、古書保存会。毎号、60頁前後。表紙は無装飾で清瀟なもの。古書保存会は、古書類の調査及びその保存を目的として発足し、総裁に徳川頼倫、会長に星野錫を擁し、会員には、当時の主だった学者蔵書家の殆どが名を連ねていた。内容は、古書の収集と保存とに力を注いだ論文が主で、この種の書物誌の先駆的役割を果たした。

江戸趣味 大正5・7—6・9。月刊。2巻16冊。中本（第2巻は半紙判）編輯兼発行人、朝倉亀三。発行所、江戸趣味会。書物誌というよりも江戸文化の研究誌で、内容の殆どが江戸文芸に関する隨筆である。毎号、口絵には彩色木版（浮世絵の翻刻）が挿入され、本文

は和紙に印刷、袋大和綴という贅沢な装訂であつたが、やはり永くは続かなかつた。

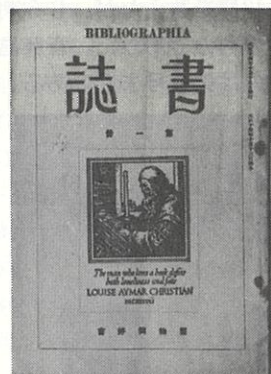
書物往来 大正13・5—15・6。概ね隔月刊。3巻19冊。菊判。編輯人、神代種亮（第7冊以後、石川巖）発行人、石川巖。発行所、從吾所好社。第6冊より半年ほど斎藤昌三も関係している。毎号、60頁前後。震災以後いち早く出された文芸趣味豊かな書物誌で、読書家、愛書家は勿論のこと古書肆などからも歓迎された。江戸文学の石川と、明治文学の神代がそれぞれ誌面の前半後半を担当し、特色ある編輯をした。特に明治文学の分野では、全集に対する逸文や掘出しの紹介など書誌的記述が多かつた。特輯として、（鷗外・紅葉の）逸文、書生氣質の序文異本考、子規・魯庵・緑雨・逍遙・露伴・思軒愚文珍文などを発行した。執筆陣も豪華な顔触れで、永井荷風、芥川龍之介、菊池寛、坪内逍遙、内田魯庵など大家も寄稿し、近代文学研究の資料的価値は十分である。

著者及蔵書 大正14・2—14・5。1巻2冊。半紙判、袋大和綴。編輯兼発行人、金子勝男。発行所、著者及蔵書社。東京の古書肆が集まり、地方資料、その他奇書珍籍の研究を標榜して発刊したもの。例えば、地方資料については、薩摩古板書目考、会津人著書並会津関係書目、江戸地誌地録など、地方史誌の書誌、書目に主力が注がれた。

書物禮讃 大正14・6—昭和5・7。季刊。11冊。菊判。編輯兼発行人、杉田長太郎。発行所、杉田大学堂書店。限定、500部。京都の古書肆から発行された古書販売目録を兼ねたもので、毎号、50頁前後。執筆者は京阪在住の愛書家が大部分で、新村出、矢野峰人、禿氏祐祥、吉沢義則、内藤湖南といった豪華な顔触れ、専門的な記事が多い。

書誌 大正14・10—昭和2・12。隔月刊。2年7冊。菊判。編輯人、岡本良知（第4冊以後、関野真吉）発行所、坂本書店（第5冊以後、文苑閣）東京帝大附属図書館内に事務所を

おいた書物同好会の会誌。会員は、岡本良知、関野真吉、植松安などで、第1冊見返の「発刊について」では、「『書誌』といふ言葉は、通俗では御座いませんが、ビブリオグラフィーの意味で、書物についての種々の研究、記述の一切を包含いたします。書誌は一箇独立の学問として、もっと盛に研究されねばなりません。本誌では新刊古書の趣味的方面や、特に日本誌に関する内外図書、地方誌料、また公私に属する蔵書などの研究紹介に及ぶ限り力を入れてみたい考で御座います」というように、書誌・書目に力を注いだ内容で、特に第3冊は郷土誌料の特輯号を組み、好論文を集めている。

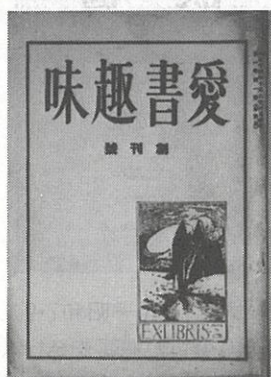


愛書趣味 大正14・10—昭和7・9。概ね隔月刊。5巻28冊。菊判。編輯兼発行人、斎藤昌三、青山督太郎。大阪の活字問屋で愛書家の青山と書痴斎藤が組み、坪内逍遙、内田魯庵、吉野作造、尾作竹猛、宮武外骨などの応援を得て発刊された書物誌。毎号、30頁前後。本文は色刷、写真版は名著の外装や名作の口絵、新旧雑誌の創刊号表紙と解題といったもので、同好の士に無料配布した。限定、500部。内容は、専ら明治文学の文献に限られ、珍本稀本の紹介、異本考、明治文学者の逸文翻刻などに主力が注がれた。創刊号の目次を拾ってみれば、翻訳文学の嚆矢、処女作並に処女出版、発禁の一新例、紅葉山人『京人形』の異本、鏡花氏の処女作、言文一致といった例で、

これは、この頃が丁度震災後の文芸復興期に当り、円本全集が続出した時代背景もあって、殊更文学趣味を横溢させ、逸文の発見、翻刻などに努めたもの。

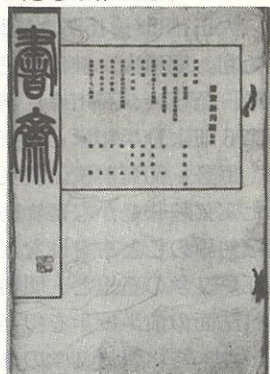
特輯も、明治初期反訳号、大円朝号、詩歌号、書誌号、明治文芸展号、文芸雑誌年表号、逸文断片号、鏡花逸文号と特色を出しており、中でも、沢田五猫庵と内田魯庵の追悼号2冊及び臨時号として出された追悼誌文献篇は、特に近代文学研究の基本的史料となる。『日本近代文学大事典』の第5巻、新聞・雑誌篇で取り上げられてないのはいかがしたものか。

戦後、昭和24年1月に復刊され、25年3月までに14号13冊を数えたが、B5判、毎号、10頁足らずのものであった。斎藤昌三が編輯に關与したのは第9号までである。



書齋 大正15・2一昭和8・7。月刊。2巻22冊。半紙判。袋大和綴。編輯兼発行人、立川幹。発行所、書齋社。毎号、32頁。和紙刷、口絵には彩色木版や書齋の組合せ切図を挿入し、カットも文具関係の石摺を縮写するなど、趣味的な編輯を通して。執筆者の顔触れとしては、主に市島春城、楠瀬日年、坂本雪鳥、西沢笛畝、橘井清五郎など。内容は、書物随筆というより、書齋そのものを主題にしていた。例えば、筆に就て、日本の硯石、是真の文筥、徐星為の書齋、呉昌碩の書齋といったふうである。その他の記事としては、紅葉山

文庫、書齋と文庫、紙・書庫の起源、仏教と書齋といったものが並ぶ。



紙魚 大正15・10一昭和4・4。概ね月刊。3期28冊。菊判。編輯兼発行人、浜野真（第8冊以後、岡戸武平）発行所、紙魚社。名古屋で発行された書物誌としては代表的なもの。第1冊の編輯後記に「古本趣味から話がハズンで、偶然的に生れたのがこの雑誌『しみ』である。僕たち三人が編輯を引きうけて尾張を中心とした文献や文人墨客の跡を探ねたら、また別な味が、つまり郷土の香気が味はれるだろう…」とあるように専ら郷土史誌としての性格が強く、郷土の学者、蔵書家などの著作の翻刻、研究を主体にしている。従って執筆者も郷土在住の研究者が多い。特輯としては、尾三歌舞篇、蟹養斎百五十年記念、今様くどき復刻、尾三祭礼篇などが編まれた。

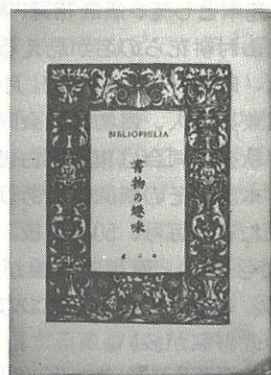
書史 昭和2・2一2・5。2冊。半紙判、袋大和綴。編輯兼発行人、青木平七。発行所、書史会。限定、300部。同会は大阪の有力な古書肆と愛書家が集まり、毎月、一定の課題のもとに古書珍籍を持寄って展覧し合ったり、出品目録を作ったりした会で、それが発展して本誌の発刊となった。執筆者の殆どが同人で、内容は、古書の解題、批評あるいは書物に関する随筆が主であった。

古本屋 昭和2・4一6・1。季刊。10号11冊。菊判。編輯兼発行人、荒木伊兵衛。発行所、荒木伊兵衛書店。編輯は『日本英語学書誌』の著

者として知られる荒木書店3代目幸太郎。先代の1周忌記念として発刊された。大阪の代表的な書物誌で、古書販売目録も兼ねる。毎号、80頁前後。本文は上質紙に2度刷、それに写真版やカットを存分に使い、口絵は和紙へコロタイプ版の印刷、表紙には毎号書物関係の版画を貼込むという凝り方。内容の殆どが書物随筆で、執筆者には関西在住の社会的に顔の広い人々を選んでいる。臨時増刊として、内田魯庵の追悼号が第7、8号の間に出されたのが、貴重な文献となっている。なお附録として、別に古書販売目録を10冊ほど出したが、「皇漢医学及本草に関する文献」「女に関する文献販売目録」などを特輯した。



書物の趣味 昭和2・11—7・3。7冊。四六倍判。編輯兼発行人、伊藤長蔵。発行所、書物の趣味社。発売、ぐろりあ・そさえて。限定、300—450部。愛書家として知られた伊藤長蔵の編刊になるもの。毎号、120頁前後。本文用紙に厚い局紙ふうの上質紙を使い、第2冊から糸綴で、口絵に原色版を惜気なく使用している点など、内容は勿論のこと、特に装訂では当代書物誌の王座を占めよう。中でも第3冊は260頁の大冊の上、口絵はボッカチョ本の原色版外1葉、挿絵は別刷共30余枚を数える豪華さである。内容は東西に互っており、諸名家のどっけおきの研究が盛ってある。特に欧米のものに主力が注がれ、高度な研究が多い。執筆者の顔触れには、新村出、内藤湖南、



神田喜一郎、寿岳文章、和田万吉、石田幹之助、矢野峰人など当代随一の書誌学者が揃っている。

第1冊から目次を拾うと、書物芸術上のプリアム・モーリスと本阿弥光悦、Hoffmanの日本文典、天学初函、日本吉利支丹本の回収、ブレイクの「彩色本」由来、欧洲最古の活字本、異本堤中納言物語に就いて、「やはらかもの」一話、Dr. Hoffmannの著書目録など。その内容の豊富さから言えば、趣味の雑誌というより、多主題に互る書誌学研究誌の面影を呈している。

なお、同じぐろりあ・そさえてから同年(昭和2)5月に書物誌『ブック・ドム』が発刊されていた模様である。

文献志林 昭和4・11—5・8。5冊。菊判。編輯兼発行人、石川巖。発行所、従吾所好社。毎号、50頁前後。書痴石川巖が『書物往来』『東京新誌』などに続けて発刊したもの。内容も当然、前者同様、江戸及び明治初期の文芸ものが中心であった。ちなみに、誌名の文献志林とは、文芸風俗に関する文献資料の堆積を意味するそうである。

あかほんや 昭和5・1—6・5。4冊。美濃半截判、袋綴。編輯兼発行人、大曲駒村。発行所、阿伽梵書屋。限定、300部。内題は赤本屋である。装訂も赤本に模して和装である。誌名が示す通り、江戸軟派文学の書誌が主で、特に川柳、狂歌に多くを割いている。創刊号

に、赤本屋連中として、飯島花月、尾崎久弥、永井荷風、山村耕花らの名が見える。

書物春秋 昭和5・10-10・2。月刊。25冊。菊判。編輯兼発行人、書物春秋会同人。発行所、書物春秋会。同会は東京の古書肆10人を同人とし、本誌はその機関誌であり、古書販売目録を兼ねる。毎号、50頁前後。装訂、印刷も贅沢なもので、珍しい口絵が付くのも特色である。執筆者は古書界につながるの深い研究者や愛書家が多い。

書物展望 昭和6・7-26・8（昭和20-22まで休刊）月刊。18巻169冊（170号）編輯兼発行人、斎藤昌三など。発行所、書物展望社。当初、編輯同人として、岩本和三郎、斎藤昌三、佐々木不知軒、庄司浅水、柳田泉の名があげられていたが、5巻8号以後は名実ともに斎藤の個人的色彩を濃くし、書物誌史上に比肩するものなき編輯業績を残した。創刊の言葉では、先行誌の永続性のなさを嘆き、書物誌の意義をと、まやかしてない出版を行う決意のほどを披瀝している。毎号、100頁前後で、書物、人物研究、随筆などの他、出版界、古書界の記事にも詳しい。明治文化史重点主義という意味では、前掲の『愛書趣味』を継承する。また、逐次附録として巻末に組んだ書物関係記事索引、発売禁止一覧、明治大正著者別大年表、慶長以来書賈集覧などの記事は後世に残る貴重な資料となった。次に主な特輯号を記すと、漁書ばなし、蔵書票、装釘を語る、読書随筆、挿画研究、翻訳文学の展望、追悼不喚洞、山の随筆、追悼馬場孤蝶翁、親燈随筆、中村吉蔵、駒村追悼、芭蕉翁頭彰記念、金沢文庫本に就いて、岳人烏水などである。

なお、昭和14年に百号記念として、主要論文随筆を抽出、執筆者索引を附して、『書祭』3冊が刊行された。ついでに、内田魯庵著『紙魚繁昌記』（昭9）以来単行された書物展望社本約130点は、書誌学文献が多く、装訂の奇抜さもあつておおいに人気を博した。

書物趣味 昭和7.9-10.8。菊判。編輯兼発行人、庄司浅水。発行所、ブックドム社。限定、600部。本文上質紙刷、毎号、64頁。書物研究家の庄司浅水の編輯になる、やや書誌学に重点をおいた書物誌。発刊の辞の1節に「出版の洪水、書物の氾濫、一箇の商品としてより以外、何らの価値もなきが如き状態にある書物をば、リチャード・ド・ベリイの云へる如く、天よりの最上至高の賜物としての位置にまで、引き上げんと努むるのが本誌発刊の使命の一つである」とあるが、僅かに1年で休刊となった。執筆者は、長沢規矩也、今沢慈海、秦豊吉、木村莊八、反町茂雄、徳富猪一郎、禿氏祐祥、市島春城、幸田成友、田中敬、関靖、矢野峰人などと多士齋々であった。

書誌学 昭和8・1-17・1（休刊）月刊。18巻102冊。菊判。編輯兼発行人、木村一郎など。発行所、書誌学社（第2巻以後、日本書誌学会）日本書誌学会は昭和6年に創立され、会員には、安田善次郎、高木利太、徳富猪一郎、内野五郎三、三村清三郎、林若樹、橘井清五郎、樋口慶千代、鹿島則泰、新村出、今井貫一、市島春城、和田万吉、諸橋轍次、長沢規矩也、川瀬一馬などがおり、本誌はその機関誌。長沢、川瀬の責任編輯で創刊され、後に橘井、久曾神昇なども加わる。内容は、大体和漢の古典に終始しており、掲載範囲として、国語漢文を主とする書誌学上の研究論文、随筆雑項、内外書誌学界の近況と定められ、他に、書目解題、諸索引などもある。特輯号には、狩谷校斎、安田善次郎追悼、蔵書印、遊仙窟、春山霞仙翁喜寿記念など貴重な文献が多い。なお、戦後、昭和40年7月に復刊され、現在に至っている。

愛書 昭和8・6-17・8。15輯16冊。菊判。編輯兼発行人、中曾根武多（第2輯以後、西川満）発行所、台湾愛書会。限定、400部。毎号、100頁前後。台北帝大の愛書家の集りであった書物の会が発展したもので、総督府図書

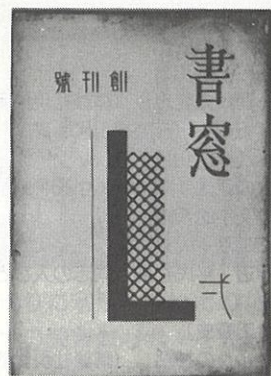
館に事務局をおいた台湾愛書会の会誌である。発起人は、阿部文夫、幣原坦、植松安、神田喜一郎、滝田貞治、矢野峰人、武田虎之助など14人。会則第2条に「東西書誌二関スル事項ヲ調査研究シ……」とあるように、書誌学的研究に重点がおかれ、特に装幀特輯号、図書保存特輯号、台湾特輯号、台湾文芸書誌号などの特輯号や第4輯別冊附録の「装本覚え書」(寿岳文章著)などは意義深い労作である。因に、第1輯から記事を拾うと、書物の趣味、書名雑話、近世に於ける愛書の精神、古書の保存に就て、古事記中巻の伝来と鴨院文庫、近松浄瑠璃丸本の奥附考、近英の文芸雑誌、ストリンベリ文献などである。なお、所蔵は昭和55年、龍溪書舎により復刻されたものである。

書物 昭和8・10—9・9。概ね月刊。2巻12冊。菊判。編輯兼発行人、竹内富子。発行所、三笠書房。実際の編輯人は書痴秋朱之介。第1号の後記で、ケルムスコット・プレス刊本に劣らない美しい立派な書物の制作を一生の仕事にしたいむねを述べている。毎号、80頁前後。表紙は木下空太郎や小村雪岱の版画を使い、口絵には世界各国の珍書や挿絵、時には色刷の版画、蔵書票の類などを紹介したりして、編輯人の意気が全体にみなぎっている。執筆者も美術関係の人が多く見られる。また第9冊ではドストエフスキー研究、第12冊ではロシア文学特輯を出すなど、西欧における文献の研究にも意をつくしている。

書物評論 昭和9・7—9・11。月刊。5冊。菊判。編輯兼発行人、坂上真一郎。発行所、建設社。毎号、110頁前後。内容は古今東西に互っているが、特に新刊の書評などが多い。また、志賀直哉、阿部知二、佐藤春夫などの流行作家の読物風随筆も少なくない。附録として、「内務省納本全覧」を連載していた。

書窓 昭和10・4—19・6。概ね月刊。17巻104冊。大型菊判。編輯人、恩地孝四郎。発行人、志茂太郎。発行所、アオイ書房。編輯に

版画家で装訂家の恩地孝四郎を迎え、発行人の恣意により贅を凝らし、徹底的に高踏性を追求したもの。恩地は創刊号の巻末で、『書窓』をして読書人のサロンとし、その対象を書誌学や考古に傾向せず、主として今日の本を、未来の本を美術領域において眺めたいと言う。次いで志茂は「雑用手帖」で、出版をあくまで純粋に道楽仕事としてやりとげる意気込みを述べている。そのため発行部数も限定700部、会員頒布とし、毎号の表紙は恩地自



身の図案色刷、口絵は前川千帆、平塚運一、川上澄生など当代版画家の木版手摺を挿入。本文は上質紙で、挿絵を存分に使い、単式凸版印刷という凝り方で、特に第3巻までは充実した編輯が続いた。しかし、第4巻以後は、恩地の病氣と時代の流れが重なって先細りとなった。その中で、時々出された特輯号は特筆すべきものが多く、詩歌筆蹟、装本研究、新聞小説挿絵、児童本、印刷研究、出版創作、夢二追憶、詩集の挿画、紙の輯、創作蔵書票、夢二スケッチ帖抄、現代書物文化、学芸随筆、ローマ字印刷研究、同図輯、製本之輯(美濃判、袋綴)などと注目に値する。

執筆者は当時の愛書家を総動員した観があり、内容の主なところは、書物趣味についての随筆の類である。とにかく恩地の手腕をいかんなく発揮した点で、書物誌の中でも際立った色彩を放った。

新刊 ア・ラ・カル・ト

書 名 (叢 書 名)	著 者	出版社	出版年	請求記号
《人文科学関係図書》				
知識工学入門 (ブルーバックス)	溝口文雄 北沢克明	講談社	1982	007-M
書物随想本の醍醐味	中島宗是	関西市民書房	1981	020.4-N
創刊号に賭けた十人の編集者	塩沢実信	流動出版	1981	051-S
こんなに役立つ博物館	樋口清之 加藤有次	かんき出版	1981	069-H
叢書文化の現在 全13巻		岩波書店	1980-82	081-S
文科の発想・理科の発想 (講談社現代新書)	太田次郎	講談社	1981	141.5-O
人はどう生きるか (講談社現代新書)	P.ミルワード	講談社	1982	159-M
世界の聖域 【継続刊行中】		講談社	1979-	160.8-S
図説日本仏教の原像 インド・中国・朝鮮	井ノ口泰淳ほか	法蔵館	1982	180.2-Z
欽定訳聖書の文学的系譜	C.C.バタース	中央書院	1980	193-B
明治両毛の山鳴り 民衆言論の社会史	田村紀雄	百人社	1981	210.6-T
大逆事件の周辺 平民社地方同志の人びと	柏木隆法	論創社	1980	210.68-K
冷泉家の歴史		朝日新聞社	1981	288.3-R
わたしの「女工哀史」	高井としを	草土文化	1980	289.1-T
ジャンヌ・ダルクの神話 (講談社現代新書)	高山一彦	講談社	1982	289.3-J
ひとり旅の風景 (講談社現代新書)	山本脩	講談社	1981	291.09-Y
アーネスト・フランチスコ・フェノロサ	久富貢	中央公論美術出版	1980	702.16-F
デューラー 人と作品	F.アンツェルプスキー	岩波書店	1982	720.234-D
絵で書いた日本人論 ジョルジュ・ピゴンの世界	清水勲	中央公論社	1981	721.8-B
東と西を超えて 自伝的回想	B.リーチ	日本経済新聞社	1982	751.233-L
親子で楽しむデザイン技法	阿部典英	青娥書房	1981	757-A
吉徳人形ばなし	山田徳兵衛	湖北社	1980	759-Y
歌をなくした日本人 (音楽選書)	小島美子	音楽之友社	1981	762.104-K
神話をつくる人たち (FM選書)		共同通信社	1980	762.8-S
かながわハイク・ガイド (かもめ文庫)	松尾良文	神奈川合同出版	1982	K-M
釣りの科学 (ブルーバックス)	森秀人	講談社	1981	787.1-M
ことばの詩学	池上嘉彦	岩波書店	1982	801-I
ことばと国家 (岩波新書)	田中克彦	岩波書店	1981	801-T
欧米人が沈黙するとき 異文化間のコミュニケーション 直塚玲子		大修館書店	1980	809-N
活剣武士のリスニング道場	E.カッケンブッシュ アルク		1980	830.4-Q
英語教育と日本語 日本語をいかに利用するか	森住衛ほか	中教出版	1980	830.708-E
英和辞典うらおもて (岩波新書)	忍足欣四郎	岩波書店	1982	833-O
英語の敬意表現	大杉邦三	大修館書店	1982	837.8-O
フランス語史	山田秀男	駿河台出版社	1981	850.2-Y
子どもと本の世界 (角川選書)	安藤美紀夫	角川書店	1981	909-A
ナルシシズムと日本人 精神分析の視点から	佐々木時雄	弘文堂	1981	910.2-S
王朝の女人像	山路麻芸	春秋社	1980	910.23-Y
青春の炎と愛 若き文学者の日々	石垣正好	昭和図書出版	1981	910.268-I
漱石と世紀末芸術	佐渡谷重信	美術公論社	1982	913.6-N74-S
因われの女たち 【継続刊行中】	山代巴	径書房	1980-	913.6-Y33

書 名 (叢 書 名)	著 者	出版社	出版年	請求記号
8時起床、晴。	横尾忠則	佼成出版社	1980	915.6-Y
青春と戦争 ある戦中派の手記	別所源二	光和堂	1980	916-B
わがいのち月明に燃ゆ 一戦没学徒の手記 (筑摩叢書)	林尹夫	筑摩書房	1980	916-H
タゴール著作集 【継続刊行中】		第三文明社	1981-	929.88-T
シェイクスピア物語	M.チュート	旺史社	1982	932.7-C
ミルトンの生涯 (研究社選書)	才野重雄	研究社出版	1982	933.1-S
ジョイスからジョイスへ	鈴木幸夫	東京堂出版	1982	939.7-J
ロレンスとエリオット	二宮尊道	研究社出版	1982	939.8-N
ヴァージニア・ウルフ入門	深沢俊	北星堂書店	1982	939.9-F
アウシュヴィッツは終わらない (朝日選書)	P.レーヴィ	朝日新聞社	1980	976-L
無知とドストエフスキー	遠丸立	国文社	1981	980.28-D

《社会科学関係図書》

変わりゆくアメリカ	北村崇郎	研究社出版	1981	302.53-K
写真でみる第三の波	A.トフラー	日本放送出版協会	1982	304-T
憲法第九条 (岩波新書)	小林直樹	岩波書店	1982	323.142-K
日本発見・人物シリーズ・日本女性の歴史 【継続刊行中】		暁教育図書	1982-	367.2108-N
ハイト・リポート 男性版 全3巻	S.ハイト	中央公論社	1982	367.6-H
21世紀の教育よこんにちは	J.ホルト	学陽書房	1980	370.4-H
キャンパスの症状群 現代学生の不安と葛藤	笠原嘉 山田和夫	弘文堂	1981	371.47-C
わかりやすい今日の教育	文部省	日本広報協会	1982	372.1-M
フリードリッヒ・フレーベル いま私たちが学ぶもの 岡田正章		フレーベル館	1982	372.34-F
学校教科書 (朝日選書)	山住正己	朝日新聞社	1982	375.9-Y
写真集幼児保育百年の歩み	日本保育学会	きょうせい	1981	376.12-Y
大学留学ハンドブック アメリカ編	今光廣一	日本工業新聞社	1980	377.6-I
思春期ブック Living, Loving and Growing up	コンフォート夫妻	富士見書房	1982	379.8-C
目で見る日本民俗誌 【継続刊行中】		日本放送出版協会	1980 -	382.108-M
メークアップの歴史 西洋化粧文化の流れ	R.コーソン	ボーク文化研究所	1982	383.56-C
人間・たべもの・文化 食の文化シンポジウム'80	石毛直道	平凡社	1980	383.8-N
藤沢のむかし話 (藤沢文庫)	丸山久子	名著出版	1982	K9-M

《自然科学関係図書》

科学の名著 【継続刊行中】		朝日出版社	1980-	408-K
和算以前 (中公新書)	大矢真一	中央公論社	1980	410.21-O
数学感覚をのばす (講談社現代新書)	岡部恒治	講談社	1982	410.4-O
バズル・ショートショート (ブルーバックス)	J.A.H.ハンター	講談社	1981	410.79-H
星座12ヶ月 (岩波ジュニア新書)	富田弘一郎	岩波書店	1980	443.8-T
女性科学者ノート めぐりあい	中村桂子	人文書院	1982	460.4-N
干潟は生きている (岩波新書)	栗原康	岩波書店	1980	468-K
動物と人間のあいだ (講談社ゼミナール選書)	今泉吉典ほか	講談社	1982	481.78-D
人間の生と性 (岩波新書)	近藤四郎 大島清	岩波書店	1982	491.35-K
日本の狂気誌	小田晋	思索社	1980	493.7-O
機械の再発見 ボールペンから永久機関まで (ブルーバックス)	中山秀太郎	講談社	1980	530.4-N
ジャンボ・ジェットはどう飛ぶか (ブルーバックス)	佐貫亦男	講談社	1980	538.68-S
鉄道の科学 旅が楽しくなる本 (ブルーバックス)	丸山弘志	講談社	1980	546.04-M
現代の核兵器 (岩波新書)	高榎 堯	岩波書店	1982	559.7-T
日本の鉄		毎日新聞社	1980	564-N
省エネルギーの知恵 節約の科学 (ブルーバックス)	橋本尚	講談社	1980	592.04-H
童話ケーキ 母と子でいっしょに作る	桐島洋子 森山サチ子	学習研究社	1980	596.6-K

図書館だより

◎閉館日のお知らせ

1月31日(月)	歯学部入試準備
2月1日(火)	歯学部入学試験
2月3日(木)	
2月4日(金)	短大部入試準備
2月5日(土)	短大部入学試験
2月8日(火)	文学部入試準備
2月9日(水)	文学部入学試験
2月28日(月)	月末閉館日
3月1日(火)	※蔵書点検
3月15日(火)	
3月25日(金)	卒業式
3月31日(木)	月末閉館日
4月1日(金)	※館内整理
4月7日(木)	
4月8日(金)	入学式
4月9日(土)	※オリエンテーション
4月13日(水)	

※印の期間、別館は開館します。

◎開館時間変更のお知らせ

2月7日から4月13日まで、開館時間を次のように変更します。

平日 9:00~16:30
土曜日 9:00~13:00

◎斎藤文庫目録が完成

昨年の9-10月に図書館の展示でも取りあ

げた、英学者斎藤秀三郎先生(1866-1929)の旧蔵図書の目録、『斎藤文庫目録』が完成、去る12月15日、刊行された。昭和51年2月、元本学顧問教授、故斎藤勇先生を通じて御遺族から寄贈があったもので、総数1990冊。図書館では、その資料的価値の高さから、個人文庫として永く保存するとともに、広く利用に供するため、目録の刊行を計画していた。

明治・大正期の英語学、英語教育学界の雄、斎藤秀三郎の名にふさわしく、蔵書の内容も80点にも及ぶ先生御自身の著作をはじめ、同時代の文法書、英語教科書、欧米の古典、それに恐らくは先生が著作の参考にされたであろう同時代の英米作家の作品など、どれも極めて貴重なものばかりである。特に先生の著作には、御自身の書き込みが随所に見られ、先生の研究に対する並々ならぬ熱意が、伝わってくるようである。さらに、こうした書き込みが、斎藤先生の業績、延いては日本の英語学史の研究に資するところ大なることは、論を俟たないであろう。

ちなみに当館では次の目録を刊行している
虎文庫目録 武田虎之助先生旧蔵図書館学関係資料目録 70P 1979年11月
渡辺文庫目録 渡辺樸雄先生旧蔵仏教学関係資料目録 23P 1980年4月
逸見文庫目録 逸見梅栄先生旧蔵仏教美術関係資料目録 16P 1980年6月
内山文庫目録 内山憲尚先生旧蔵保育学関係資料目録 183P 1982年7月

アゴラ——鶴見大学図書館報——

第14号 1983年1月15日発行

鶴見大学図書館発行(館長 手崎政男) 〒230 横浜市鶴見区鶴見2-1-3 045-581-1001